早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　24号―1　二〇一六年九月

語り直される「大義」

―三島由紀夫『憂国』ロシア語訳における翻訳の戦略性―

村上智子

一　はじめに

本論では、ソビエト連邦（当時）の雑誌『外国文学』[1]一九八八年十月号に掲載された、グリゴーリイ・チハルチシヴィリ[2]の手になる三島由紀夫『憂国』ロシア語訳[3]の特徴的な翻訳について検討する。さらに、『憂国』ロシア語訳テクストが発表されたペレストロイカ期の言論活動について整理したうえで、この翻訳テクストから読み取れる同時代ソ連に対する批評性を明らかにする。

雑誌『外国文学』は、ソ連においていわゆる「西側」の文化を紹介する雑誌として機能してきた。ペレストロイカ期には、ナボコフやブロツキーなど、「亡命ロシア人」の作品も掲載された。チハルチシヴィリ訳『憂国』はこのような流れの中で世に出たものである。そしてチハルチシヴィリによれば「何回かの不成功に終わった試み」[4]の後、念願かなって掲載されたものであった。また、一九九八年十月号から『外国文学』の編集長をチンギス・アイトマートフがつとめていることも注目すべき点である。アイトマートフはゴルバチョフを支え、一九九〇年にソ連大統領会議のメンバーとなった人物である[5]。旧ソ連における三島由紀夫及び三島作品の紹介の背景として、このような政治的な状況は無視できない。だが、この『憂国』ロシア語訳テクストには硬直化した体制を批判するペレストロイカの影響だけではなく、ペレストロイカそのものを相対化するような戦略性を読み取ることができる。

本論では、『憂国』ロシア語訳テクストにおける天皇制にまつわる語の表記に着目することでその戦略性を明らかにする。

二　別格化される「大義」

―『憂国』ロシア語訳の特徴―

グリゴーリイ・チハルチシヴィリ訳『憂国』ロシア語版とともに、彼の手になる評論『聖セバスチャンの殉教、あるいは死に魅せられし者』[6]が雑誌『外国文学』に掲載された。この評論は、それまでソ連に

おいて、作品を公に翻訳紹介することのできなかった作家三島由紀夫とその代表作について紹介し論じたものである。ソ連で三島が「ファシスト」というレッテルを貼られ、彼の作品が発禁になりソ連の読者へ三島由紀夫の作品が行き渡らなかった歴史を振り返った後で、チハルチシヴィリはこのように述べる。

幸いなことに、時は変わった。今は作家の創作と人生の道のりをより落ち着いて分析することができる。矯正や暴露なしに、文学的分析を単純化されたイデオロギー的図式ととりかえずに。（中略）もっとも簡単なのは、おそらく、三島を怪物か悪魔の落とし子であると評価し、恐怖をもって関わることだったろう。それを止めるのはたった一つの要素―三島の疑いようのない才能だ、それは無条件に病的なものだ、しかしだからこそ明瞭な輝かしいものであるともいえる。

三島をファシストと断じたソ連当局[7]や、それを甘んじて受け入れたソ連文学界に対するチハルチシヴィリの批判的な態度が示されている。また、特定の見方をされやすい三島（作品）の魅力をソ連の読者に伝えたいという強い意志もうかがえる。

では、翻訳テクストにおいてどのような特徴がみられるのだろうか。特に、武山中尉と麗子が抱くイメージとしての「大義」がどのように翻訳されているか注目してみたい[8]。

二・二六事件の勃発によって召集された夫の帰りを待つ麗子が、死を予感しながら形見を整理する場面では、「大義」という単語に特徴的な表記がみられる。

（原文）

麗子はその一つの栗鼠を手にとつてみて、こんな自分の子供らしい愛着のはるか彼方に、良人が体現してゐる太陽のやうな大義を仰ぎ見た。

（ロシア語訳）

ее глаза видели ослепительное сияние Великого Смысла,олицеворением которого являлся муж.

麗子が仰ぎ見る「大義」は、ロシア語で「偉大な思考」と訳され、「偉大な Великого」と「思考 Смысла」の頭文字はそれぞれ大文字で表記され強調されている。

また、中尉と麗子の快楽と「大義」のかかわり方を描く場面においては、ロシア語訳テクストにおいては「大義」（Высшей Справедливости）「神威」（Божественной Воли）「道徳」（Нравственности）「美」（Красоты）「正義」（Истины）の部分は、頭文字が大文字で表されている。

（原文）

あのとき二人は、もちろんそれとははつきり意識はしてゐないが、ふたたび余人の知らぬ二人の正当な快楽が、大義と神威に、一分の隙もない完全な道徳に守られたのを感じたのである。二人が目を見交はして、お互ひの目のなかに正当な死を見出したとき、ふたたび彼らは何者をも破ることのできない鉄壁に包まれ、他人の一指も触れることのできない美と正義に鎧はれたのを感じたのである。

（ロシア語訳）

В тот миг,хотя они об этом и не думали,оба почувствовали,что сокрытое от всех счастье находится под надежной защитой Высшей Справедливости,Божественной Воли и не сокрушимой Нравственности.Прочтя в глазах друг друга готовность принять достойную смерть,поручик и его жена вновь осознали,какая мощная стальная стена,какая прочная броня Истины и Красоты обегает их.

中尉と麗子が最後の情交を終えて死の準備をする際にも、中尉が殉ずる（少なくとも彼自身はそのように考えている）皇軍の「大義」は、頭文字が大文字で表記され強調されている。例えば、中尉の遺書は以下のような表記である。

（原文）

「皇軍万歳　陸軍歩兵中尉武山信二」

（ロシア語訳）

《Да здравствует Императорская Армия! Поручик Синдзи Такэяма》

原文で「皇軍」に当たる部分は Императорская Армия と訳され、頭文字が大文字となっている。

また、死に臨んで白無垢姿になった妻麗子を見る中尉の様子は以下のように描かれている。

（原文）

中尉は目の前の花嫁のやうな白無垢の美しい妻の姿に、自分が愛しそれに身を捧げてきた皇室や国家や軍旗や、それらすべての花やいだ幻を見るやうな気がした。

（ロシア語訳）

Белая,похожая на невесту,неподвижная фигураолицетворяла для поручика все то,ради чего он жил.Императора,Родину,Боевое Знамя.

（再訳）

白い、花嫁に似た衣装を着た動じない姿は、中尉にとっての生きる目的―天皇・祖国・軍旗―のすべてを具象化していた。

ここで、「輝かしいシンボル」である「皇室」「国家」「軍旗」の訳語はすべて頭文字が大文字となっている。中尉の抱く「大義」を象徴するこれらのイメージは、表記の仕方によって別格化される。

さらに、ロシア語では、文頭以外の特定の単語を大文字にするとき、その語は特別な意味を帯びる。それは「固有の何か」という意味であり、時には「神」またはそれにかかわるものを意味することもある。「神威」という言葉の頭文字を大文字で表記するというのはソ連においては特別な意味があった可能性が高い。なぜなら、ソ連の中央政府は無神論の立場をとっており[9]、それは体制側の言語操作にもあらわれていたからだ。「神」という単語を例にとってみれば、ソ連では頭文字を大文字で書かないことになっていた[10]。

神あるいはそれに類するものを大文字にして綴るということは、無神論をうちたててきた体制を批判する意味を持つ記号として機能した可能性が大いにある[11]。

言葉をどのように表記するのかによって、その人のイデオロギー的スタンスが読み取れるような場合があるとグセイノフは著書『1990年代のロシアのディスコースにおけるイデオロギー素』においてまとめている。その内容について、高橋健一郎氏の書評論文から引用する。

> 語末の《ъ》をはじめとしていくつかの文字が1918年の正書法改正によってロシア語のアルファベットから排除された。正書法の改正自体は革命前から革命勢力とは別に言語学者たちによって議論されていたものであり、本来は革命とは関係ないのだが、1918年に実施されてからはそれは民主主義的な言語の簡略化志向や、また世界全体を革命的に変革しようという時代の雰囲気に呼応したものとみなされるようになる。その中でこれらの排除された文字は「忌まわしい過去の遺物」と捉えられ、その意味でイデオロギー素となるのである。そして逆にペレストロイカの時代には、市場経済にちなんだ時代のキーワードとしての《банкъ》（銀行）、《коммерсантъ》（実業家）という単語の末尾に《ъ》という文字が使われるようになり、再び別の意味での「イデオロギー素」となった[12]。

《ъ》という文字は硬音記号と呼ばれ、子音と母音の間に置かれることにより子音と母音を二つの独立した音にする役割を果たす。そして、一九一八年のロシア語正書法改正までは硬子音で終わる語の語末に表記されるものであった。ソ連誕生直後の正書法改正によって、語末に《ъ》を表記することはなくなった。ソ連誕生直後は中央政府が全否定した「忌まわしい過去」を象徴するものとして《ъ》は機能していた。しかしペレストロイカ期においては、それまで否定されていた資本主義と関係の深い言葉に使われ、旧制度から脱却する「ペレストロイカ」という時代を象徴する記号として機能した。

神あるいはそれに類するものを大文字にして綴るということは、宗教を否定したソ連政府からすればまさに「忌まわしい過去の遺物」と

捉えられるような表記である。しかし、ペレストロイカ期には硬直化したイデオロギーを批判するような「宗教の復権」を象徴するものとして機能したと考えられる。

中尉と麗子の「大義」が大文字の表記によって別格化され語られるということは、ペレストロイカの政策キャンペーンの一環のように読み取れるかもしれない。しかし、『憂国』ロシア語訳テクストはそのような単純な構造ではない。

ここで確認しておきたいのは、ロシア語訳テクストにおける天皇にまつわる言葉の表記の仕方である。「弐」の章の最後の部分で登場する「教育勅語」と「天皇皇后両陛下の御真影」という単語が、ロシア語訳ではどのような表記になっているのか注目してみよう。

（原文）

これらのことはすべて道徳的であり、教育勅語の「夫婦相和シ」の訓えにも叶つてゐた、麗子は一度だつて口答えはせず、中尉も妻を叱るべき理由を何も見出さなかつた。階下の神棚には皇太神宮の御札と共に、天皇皇后両陛下の御真影が飾られ、朝毎に、出勤前の中尉は妻と共に、神棚の下で深く頭を垂れた。捧げる水は毎朝汲み直され、榊はいつもつややかに新しかつた。この世はすべて厳粛な神威に守られ、しかもすみずみまで身も慄えるやうな快楽に溢れてゐた。

（ロシア語訳）

отношения супругов зиждились на глубокой нравственной основе- ведь закон,установленный императором,гласил: 《Муж и жена должны жить в полной гармонии》. Рейко никогда и ни в чем не перечила мужу,ни разу не возникло у поручика повода быть ею недовольным. В гостиной первого этажа,на алтаре,стояла фотография императорской фамилии,и каждое утро,перед тем как поручик отправлялся на службу,молодые низко кланялись портрету.Рейко ежедневно поливалв священное деревце сакаки,росшее в кадке перед алтарем,и его зелень всегда была свежей и пышной.

「教育勅語」は、「天皇の名において定められた法律」と訳され、「天皇」を示す単語 императорのの頭文字は大文字となっていない。また、中尉と麗子が「天皇皇后両陛下の御真影」に毎朝頭を下げることが語られる部分では「御真影」は фотографиииимператорской фамилии と訳されており、「天皇の」という意味を表す形容詞 императорской の頭文字は大文字となっていない[13]。中尉と麗子の「大義」に大きく影響を与えている天皇に関する表象であるにも関わらず、先に挙げた「国家」「軍旗」などのようには語頭が大文字で強調されていない。また、引用した原文の傍線部「この世はすべて厳粛な神威に守られ、しかもすみずみまで身も慄えるやうな快楽に溢れてゐ

た。」は、ロシア語訳においては翻訳されていない。

頭文字が大文字で表記され別格化されている「皇室」「国家」「軍旗」は、中尉が麗子の白無垢姿に見出した「花やいだ幻」であり、「ほかの誰にも許されない境地」に身を置くためのものである。また、先述した大文字表記が使われている「大義」「神威」「道徳」は、「余人の知らぬ二人の正当な快楽」を守るためのものとして描かれている。つまり、他の干渉を許さないような、「自分の肉の欲望と憂国の至情」が合わさった中尉の個人的な信条にかかわる概念は別格化されている。これらの別格化された概念には麗子が関わっていることも特徴的である。

それに対して、「教育勅語」「御真影」という天皇の権力を象徴するものには大文字は使われていない。言うまでもなく、「教育勅語」も「御真影」も日本固有のものであるため、固有名詞として頭文字を大文字で表記するのが通常であろう。ロシア語訳テクストではそれぞれ「天皇の名において定められた法律」「天皇の写真」という説明的な表現に置き換えられ、固有名詞として扱われてはいないかのようである。日本とは異なる文化的・政治的背景を持つソ連の読者にもわかりやすいように説明的な表現が使われていると考えられるが、それは結果として小説内における「現実の」天皇制から別格性を失わせるものになっている。

また、先述のようにロシア語訳テクストでは「厳粛な神威」の部分はカットされているが、それは「御真影」に毎朝頭を下げ、「教育勅語」の教えにもかなっているという当時の国家体制に順応した生活が「神威」とは切り離されていると読み取れる。中尉と麗子が独自の信条によって自害を決意した場面で「神威」が大文字によって強調されているのとは対照的である。

中尉と麗子が抱く「大義」は固有名詞的な表現によって別格化され強調されているのに対し、教育勅語や御真影など具体的な天皇制の道具は一般名詞的な表現によって固有性を剥奪されている。「天皇」という存在を楯にして「大義」を個人化し、自らの美学に殉じようとする[14]二人の性質が、翻訳テクストにおいて顕在化しより強調されているといえる。

「壱」から「伍」までの五部構成であるこの小説は、麗子が夫のあとを追うように自害する場面で幕を閉じる。その彼女の最期の場面においても、ロシア語訳テクストでは特徴的な表現の置き換えがみられる。

（原文）

それから永いこと、化粧に時を費した。頬は濃い目に紅を刷き、唇も濃く塗つた。これはすでに良人のための化粧ではなかつた。残された世界のための化粧で、彼女の刷毛には壮大なものがこもつてゐた。

（ロシア語訳）

Долго она накладывала на лицо косметику.Накрыла

щеки румянами,ярко подвела помадой губы.Грим предназначался уже не для любимого,а для мира,который она скоро оставит,поэтому в движении кисточки было нечто величавое.

（再翻訳）

彼女は長い時間顔を化粧した。頬紅をつけ、鮮やかに口紅を塗った。化粧はすでに愛する者のためではなく、彼女がもうすぐ置き去りにしようとする世界のためであると定められていた、だから刷毛の動きには何か荘厳なものがあった。

「残された世界」とは、原作テクストの文脈から考えれば「麗子にとってすべてであった中尉がこの世を去った後、麗子の手元に残った世界」であり、「中尉と麗子の亡骸が発見される世界」だと考えられる。「残された」という受け身の表現になっていることで、「残された世界」の裏側にある自害という動作の主体がぼかされる効果がある。しかし、翻訳において動作の主体があいまいな表現は理解を妨げる要因になるため、動作の主体を浮き彫りにした翻訳になったと考えられる。[15] 表現が置き換えられることによって、ロシア語訳テクストにおいては麗子の主体性がより強調されている。

『憂国』本文で述べられているように、麗子は「良人のすでに領有してゐる世界に加はることの喜び」のみをいだいて、のど元に懐剣を突き刺し自害する。結果として「教育勅語」の内容にも反しない「従順な妻」としての役割から外れることなく生を終えたとはいえ、死に臨む瞬間のみ、彼女は化粧という行為によって「軍人の妻」としての型からずれた形で、主体性を獲得しようとして世界と向き合おうとするのである。

三　翻訳という「戦略性」

本節では、チハルチシヴィリの翻訳テクストから「戦略性」を読み取り、ペレストロイカ期における三島由紀夫作品のロシア語翻訳の意義について再評価を試みる。

大義を個人化するという行為は、検閲などの規制が緩和されたペレストロイカ期といえどもたやすく行えるものではなかった。なぜなら、ペレストロイカ期の「自由」は、あくまでもソ連の体制を立て直し強化するためのものだったからである。

私はみなさんにお願いする。自分の感情、自分の便宜、都合のよい固定観念を克服していただきたい。克服して、国民や社会のことを考えていただきたい。そうしないとわれわれは、始めた仕事を前へ進めることができなくなる。[16]

ペレストロイカ政策によって検閲が緩和され、文学にも自由が訪れたかに見えた。しかし、このゴルバチョフの言葉からもわかるように文学者たちに要求されたことは、個人的な嗜好を捨てて「国民や社会

のこと」を考えることであった。

そのような政治的キャンペーンに呼応するような小説は、たとえば次のようなものである。ペレストロイカ文学の旗手と呼ばれていたチンギス・アイトマートフの小説『処刑台』[17]において、主人公の「神学生」アヴジイの姿を借りて、ソ連の政治体制やはびこる麻薬売買に対する鋭い批判が行われている。

『処刑台』は、ソ連の文芸誌『新世界』[18]一九八六年六・八・九号に掲載されたものである。この小説は「ソヴェート社会に向けて放った血と涙のにじむような問いかけなどにより、連載開始と同時に文学界はもとより、一般読者から宗教界までを巻き込む反響を呼び、とりわけ若い層に深い感動と共感をもって迎えられた」[19]という。一九八六年七月に『処刑台』が休載されると、「上部から差し止められたのではないかといった類の憶測が飛び交い、編集部への問い合わせがあいついだ」[20]ほどの人気ぶりであった。ソ連の政治体制や社会に対する鋭い批判が描かれ、それゆえに抑圧されていると感じていた人々を強くひきつける小説であったと考えられる。

しかし、『処刑台』における宗教というモチーフは単に「古い政治体制を批判するもの」としてのみ機能している。沼野充義は、ペレストロイカ期の文学について次のようにまとめている。

ペレストロイカによって切り開かれた言論の自由によってまず世に出たのは、変わりばえのしない「社会的コミットメントの文学」（あるいは、批評家ヴィクトル・エロフェーエフの言葉を借りれば「ハイパーモラリズムの文学」[ママ]だった。（中略）いずれも、「体制翼賛」の方向が「体制批判」へと一八〇度転換しただけで、文学的に新しいヴィジョンを示した作品とはとうてい言えないだろう。[21]

不条理な作風で知られる作家ナールビコワ[22]は、ペレストロイカ以後のソ連と芸術の関係についてこのように述べている。

わたしたちは今〈デキルけれどデキナイ〉という時代に生きているわ。（中略）わたしが興味を持つのは、個々の問題じゃなくて、この〈デキルけれどデキナイ〉なの。（中略）きっとこれは芸術にとっていちばん恵まれた時代かもしれない。とくに不条理の芸術にとって。わが国ほどに不条理な社会をわたしは知りません……

彼女がアイロニカルに述べるような「芸術にとっていちばん恵まれた時代」に発表された三島作品のロシア語訳は、同時代の「自由」を利用して、ペレストロイカという政治的キャンペーンの性質を諷刺し、それを内破しようとする戦略性を読み取ることができる。

チハルチシヴィリの手になる『憂国』ロシア語訳では、中尉と麗子の抱く「大義」は固有名詞的な表現によって別格化されて語られる一

方で、国家権力そのものとしての天皇表象は一般名詞的に語られていることによって、二人の「大義」の向かう先と、具体的な天皇の権力とが明確に区別されている。その表現はペレストロイカ期における旧体制批判の役割を果たすにとどまらず、国家への忠誠のためにある「大義」を逆手にとって「大義」そのものを、国家体制を内破しようとする試みを可能にした。それは、ソ連における体制を諷刺した小説と類似する点でもある。

ペレストロイカ期になってようやくソ連で公に出版が許可された小説のひとつとして、ザミャーチン『われら』[23]が挙げられる。この小説は一九二〇年から二二年にかけて書かれ、二四年には英訳も出版された。しかし、一九二七年にプラハの雑誌にロシア語原文が掲載された際に、「ソビエト当局に対する公然たる挑戦」を含んだ作品だと当局に判断され、ザミャーチンはあらゆる出版活動を禁じられた。[24]『われら』テクスト内では、全地球が「単一国」という権力に統括され生物の衝動（性欲など）もすべて「単一国」のシステムに統御されているという設定がある。主人公が「講堂」へ行くよう指令を受け、そこでのセレモニーに参加するシーンは次のように描かれている。

> さあ、合図のベルだ。われらは立ち上って**単一国国歌**を歌った——演壇には、機智をふりまきながら金色のラウドスピーカーをきらめかせて大声弁士（フォノ・レクトル）が立っている。
> （中略）突然、私がここに来ているのは、むだなことだという気がした。（何で《むだ》なのだろう？ 指令を受けたのだから来ないわけにはいかないだろう？）ただ上っ面だけですべてが空虚に思えた。注意力のスイッチを入れるのは困難なことで、弁士の話が根本的テーマに移ったときにやっとスイッチがはいった。

『われら』と同時期にようやく公に翻訳出版できるようになった『憂国』テクスト内に登場する全体主義的な体制を、ソ連の体制と重ねて読解してみると、同時代ソ連の体制を相対化し内破しようとする試みがあぶり出される。『われら』で描かれている、ソ連政府を連想させる全体主義的なシステムを大がかりな儀式によって賛美する姿は「御真影」に敬礼し「教育勅語」を固く守る「天皇の赤子」の姿と重なるところがある。

『憂国』「弐」章に登場する「御真影」「教育勅語」を、『われら』に描かれた「単一国」賛美の儀式のイメージと重ね合わせて読解してみると、チハルチシヴィリの「天皇制」を翻訳する姿勢から、全体主義的なシステムを逆手にとって国家のイデオロギーを個人化し、システムを内破しようとする試みが読み取れる。

『憂国』における天皇制は、ペレストロイカのキャンペーンにのっとるような、古いソ連体制を批判するための「異国のエキセントリックな思想」として使われてはいない。硬直化したソ連体制を批判するために「宗教」という別の権力を持ち出して二項対立化し語るのみであったペレストロイカ文学に対し、『憂国』ロシア語訳テクストは、

チハルチシヴィリの翻訳によって複雑な権力構造を有するものになった。だからこそ『憂国』ロシア語訳はペレストロイカ期という時代に対する批評性を浮き彫りにすることができるテクストとなった。

四　おわりに

本論では、旧ソ連において三島由紀夫作品の発禁がどのように解かれ、その後チハルチシヴィリによって翻訳紹介されたのかを明らかにした。表現・表記の特徴を整理したうえで、そこに（翻訳テクストが発表された）同時代に対する戦略性を読み取ることで『憂国』ロシア語訳テクストをペレストロイカ期の文学として再評価することを試みた。

『憂国』ロシア語訳テクストでは、中尉の「自分の肉の欲望と憂国の至情」が合わさった個人的な信条にまつわる概念は頭文字が大文字で表記され別格化されている。その別格化された概念には麗子が介在し、中尉に見られることによって麗子は「大義」を体現する。そして、自害直前に化粧という行為によって主体的に世界と向き合おうとする。それは「軍人の妻」としての型からはずれる行為であり、体制を内破する行為となる。いわば、『憂国』ロシア語訳は個人化された大義が体制を内破しようとするまでの過程を描いたテクストであると解釈できるのだ。

ソ連の社会主義体制へのアンチテーゼとしてのみ別格化された「大義」が機能することなく、中尉と麗子という〈個人〉が政治体制を相対化できるものとして読み取れるように天皇にまつわる表象が「翻訳」されることによって、『憂国』ロシア語訳テクストは同時代のソ連文学とは一線を画した批評性を有するものとなった。そして、チハルチシヴィリをして「彼（三島・引用者注）がいかに異文化的な側面を持っていようとも、ロシア人の愛の包容から逃れられるとは思えない」[25]と言わしめるほど、三島由紀夫及び彼の作品は、旧ソ連およびロシアにとって近しいものとなっているのだ。

※引用部分の傍線は引用者による。

注（1）　原題は《Иностранная Литература》。一八九一年に現在のサンクトペテルブルグで原型となる雑誌が創刊された。現在の名称となったのは一九五五年からである。現在でも月一回発行されている。ソ連およびロシアにおいては代表的な、「外国」文学を紹介する雑誌といえる。

（2）　チハルチシヴィリは一九五六年にトビリシで生まれ、モスクワ大学で日本文学を専攻した。大学卒業後は、雑誌『外国文学』の編集にたずさわりながら、日本文学の翻訳を行っている。三島由紀夫の作品が発禁扱いだった時代からひそかに彼の作品の翻訳を行い、ペレストロイカ期に翻訳したものを世に発表するようになった。ロシアにおいて三島由紀夫を広く知らしめるのに多大な貢献をした人物といえる。二〇〇七年には第十六回野間文芸翻訳賞を受賞している。ソ連で発禁だった三島の作品を粘り強く翻訳し続けた姿勢が高く評価されたものである。また、ボリス・アクーニンという筆名で探偵小説家としても活躍している。政治に関する発言も目立っており、二〇一二年三月のロシア大統領選挙に先んじて行われた大規模な反プーチン市民デモの先頭に立ったこともある。

（3）　*Мисима Ю*. Патриотизм/Пер.с.яп.Чхартишвили Г.//Иностр.

Лит.–1988–№10–С. 212–219
なお、原作テクストの書誌情報は次の通りである。
三島由紀夫『憂国』（初出『小説中央公論』冬季号、一九六一・一）
本文引用は『憂国』（『決定版　三島由紀夫全集　第二〇巻』二〇〇二・七、新潮社）による。

（4）ボリス・アクーニン「ロシアの作家ミシンカ」（イルメラ＝日地谷キルシュネライト編『ＭＩＳＨＩＭＡ！　三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』二〇一〇・一二、昭和堂）

（5）小松久夫・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』（二〇〇五・四、平凡社）

（6）*Чхартишвили Г.* Мучениче́ство Святого Себастьяна, или заворожённый смертью //Иностр. Лит.–1988–№10–С. 203–212
なお、引用部分の翻訳は引用者、翻訳校正は楠哲也トーマス氏によるものである。

（7）ソビエト大百科事典の記述に「三島の大部分の小説の主要な登場人物は、物理的あるいは心理的な不具者であり、彼らは血、恐怖、残酷さ、あるいは倒錯した性行為に惹きつけられているように見受けられる。極右的な派閥の代弁者、三島由紀夫は忠君愛国的な伝統の復活のために行動し、ファシズムを広めた」（翻訳は引用者による）とある。これは本稿で取り扱っているチハルチシヴィリの評論の冒頭に引用されたものである。

（8）拙稿「ロシアにおける『憂国』の受容―「革命」のイコンとして」（『リテラシー史研究』第八号、二〇一五・一）では、『憂国』原作テクストとロシア語訳テクストについて主に麗子について分析を行ったが、本論では天皇制にまつわる表現という観点から主に分析を行う。

（9）ソ連憲法においては信仰の自由は保障されていたが、ソ連中央政府は無神論の立場をとっており、キリスト教の教会をはじめとする宗教団体はひっそりと活動することを余儀なくされた。レーニン・スターリン・フルシチョフ時代には教会の爆破や閉鎖、聖職者の逮捕・殺害など、宗教弾圧が行われていた。ロシア正教とソ連政府の関係性については廣岡正久『ロシア正教の千年　聖と俗のはざまで』（一九九三・一二、日本放送出版協会）に詳しい。ペレストロイカ期においては、宗教弾圧も緩和された。

（10）高橋健一郎「現代ロシア語における「ソビエト語」と卑俗語：グセイノフ著『１９９０年代のロシアのディスコースにおけるイデオロギー素』に関する読書ノート」（『札幌大学外国語学部紀要　文化と言語』第六三号、二〇〇五・一〇）

（11）宗教を用いてソ連の体制の性質を諷刺し批判する文学は、ペレストロイカ期以前の検閲が厳しかった時代には公には出版されない「地下文学」としてソ連において読まれていた。ミハイル・ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』は、スターリン大粛清時代に書かれ、その内容から作者の生前には出版がかなわなかった。ソ連反体制文学の金字塔と呼ばれる小説である。小説内で、人智を超えた存在である悪魔たちは無神論者を嘲笑い、彼らを窮地に陥れる行動を繰り返している。宗教はソ連体制を諷刺する際に効果的であったことがうかがえる。なお、この注はブルガーコフ／水野忠夫訳『巨匠とマルガリータ』（二〇〇八・四、河出書房新社）訳者解説を参照したものである。

（12）注（10）に同じ。

（13）ソ連の新聞における昭和天皇崩御の記事においては、昭和天皇は императуР Японии Хирохито（直訳すれば日本の天皇裕仁）と表記されており、固有名詞である「日本」「裕仁」の頭文字が大文字となっている（Известия–1989№8 7 января 参照）。また、ソビエト大百科事典では「教育勅語」は《Имперский эдикт о воспитании и образовании》（直訳すれば「帝国の教育と養育における布告」）と表記され、「帝国の」を意味する形容詞 Имперский は頭文字が大文字になっている（БолшаяСоветскаяЭнциклопедия.Изд3-е.т.30.1978 参照）。固有名詞として「教育勅語」がとらえられていることがわかる。「御真影」は当時ロシア語で一般的にどのような訳語があてられていたのかは調査中であるが、「教育勅語」の訳され方を考慮すると、同じように固有名詞としてとらえられているであろうと推測できる。

語り直される「大義」（村上）

（14）松本健一「恋愛の政治学―『憂国』と『英霊の声』」（『國文學　解釈と教材の研究』一九八六・七）に、『憂国』は「情念、心情のみを描いていたのであり、いわば政治の全否定を果たしている」との指摘がある。

（15）英訳版でも、「麗子が置き去りにしようとする世界」と訳されている。（Yukio Mishima/transl.Sargent G.W.//"Patriotism" Death in midsummer and Other Stories.Canada:New Directions Publishing Corporation.1966

（16）本文引用はゴルバチョフ／国際親善交流センター編・訳『革命―ペレストロイカ―』（一九八七・一一、にんげん社）

（17）*Айтматов* Ч.Плаха-М: Молодая гвардия,1987-стр.302
日本語訳は佐藤祥子（一九八八・三、群像社）

（18）原題《Новый Мир》。ソ連を代表する文芸誌であり、ペレストロイカ期は文学の自由化に積極的に寄与した。

（19）佐藤祥子「解説」（アイトマートフ／佐藤祥子訳『処刑台』一九八八・三、群像社）

（20）注（19）に同じ。

（21）沼野充義「新しくないぞ、私は」（『現代詩手帖』一九九一・五）

（22）ナールビコワは、一九八八年に中編『昼の星と夜の星、光の均衡』でデビューしている。前衛的な文体とエロティシズムあふれる物語は、旧ソ連およびロシアの文壇で異彩を放っている。（沼野恭子訳『魔女たちの饗宴　現代ロシア女性作家選』一九九八・三、新潮社　参照）

（23）日本語訳引用はザミャーチン／川端香男里訳『われら』（一九九二・一、岩波文庫）

（24）川端香男里「解説」（ザミャーチン／川端香男訳里『われら』一九九二・一、岩波文庫）

（25）注（4）に同じ。